

主 題：いつか必ず評価は下る 2

聖書箇所：コリント人への手紙第一 3章 10-23節

聖書が私たちに教えること、それは私たち人間にはさばきがあるということです。だれであっても、いつか必ず神の前に立つときが来るのです。この I コリント 3 章は特に、クリスチャンのさばきについて教えています。すべての行ないに対して神の評価が下るのだと。なぜパウロはそのことをコリント教会の人たちに教えたのでしょうか？それは彼らが余りにも無益なことに心奪われ、彼らの熱心さは何の益ももたらしていなかったからです。むしろ、彼らのその熱心さが教会を混乱させていたのです。彼らの行ないは神に喜ばれるものではありませんでした。ゆえにパウロは、人々の評価や自己満足ではなく神がどのように見られるのかを考えるように、そして、神が喜んでくださることこそ私たちの動機であるはずだと教えるのです。コリント教会の人たちの奉仕が、またその生き方が価値あるものとなるように、神のすばらしさが現わされるようにと、パウロは彼らに教えます。

今日私たちは、パウロのこの手紙を通して、私たちもいつか必ず神の前に立つときが来たとき後悔することがないように、「私たちが少しでも価値ある人生を送るために」、覚えておくべきことを見てゆきます。3：10-17までは既に(9/21 礼拝で)学びました。少し復習しましょう。

☆私たちが本当に価値ある人生を送るために

Ⅰ. 私たちにはさばきがある。 10-15節

コリント教会の人たち、また私たちもともすれば今が良ければそれでいいとし、後で後悔することなど考えません。ゆえにパウロは「私たちにはさばきがある」ことを覚えなさいと教えます。そのために、

・まず、イエス・キリストを信じる必要があります

なぜなら、私たちが造り、私たちにいのちを与え、絶えず必要なものを与え、導いてくださったのはこの神だからです。本当に私たちが導き助けてくれるのはイエス・キリストだけです。

これが神の啓示であり、パウロがいのちをかけて宣べ伝えているメッセージなのです。

・イエス・キリストを土台にするとは？

＜パウロのしたこと＞

パウロがアグリッパ王に弁明していることばを見ましょう。使徒の働き 26：19-23 「こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めてにふさわしい行ないをするようにと宣べ伝えて来たのです。21 そのために、ユダヤ人たちは私を宮の中で捕え、殺そうとしたのです。22 こうして、私はこの日に至るまで神の助けを受け、堅く立って、小さい者にも大きい者にもあかしをしているのです。そして、預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。23 すなわち、キリストは苦しみを受けること、また、死者の中からの復活によって、この民と異邦人とに最初に光を宣べ伝える、ということです。」

このイエスだけを自分の救い主、自分の生きる目的とすることです。11節の「だれも」とはクリスチャンのだれもが、という意味です。この土台がなければすべてはむなしいとパウロは言います。

・神が判断されることは行いよりも動機である

コリント教会の人たちの熱心さの動機は間違っていました。愛に欠けていたため分裂分派を引き起こしていました。神が見られるのは私たちの心の動機です。それが神のきよさにかなうものでなければその行ないは永遠に残らないし、神からの報いを受けることもありません。

II. 神に対して聖くあれ 16-17節

・神殿とは、どこよりも聖いところ、また、聖くなければならないところです。

・ここで言われている「神殿」は、単数形が使われていることから、「教会」を指しています。教会は神が臨在され、神のご性質が最も顕著に現わされているところです。ゆえに、私たちは自分自身をよく吟味して神のきよさを汚さないようにするべきです。17節に「あなたがたがその神殿です」とあるように、神の教会を私が構成しているという自覚が必要です。コリント教会の人たちは自分をアピールすることが第一だったのです。また、そんな時に、今いるこの社会ではできないこと、認められないことを教会内で平気で行なってしまうようなことはないでしょうか？

続いて、18節以下を学んで行きましょう。

III. 人にはいつも謙遜であれ 18-21a 節

パウロが人々に戒めることは、「愚かになりなさい」と「誇ってはいけません」ということです。これらのことはコリント教会の人たちに特に顕著に見られることだったからです。そのために教会は危機にあったのです。ゆえに、パウロはこの戒めをし、本当の基準を知ると教えるのです。イエス・キリストを信じ救われた者に神は聖霊によって教えてくださっています。18節の「欺いて」というのはこの聖霊の働きに逆らうことを意味します。

・生まれながらの私たちは何を誇る者でしょう？

私たちは生まれながらに自分を誇るような者です。「自分は今の世の知者だと思う」とは、当時コリント教会の人たちはギリシャ哲学の影響を受けており、人間の知恵によって神に近づくことができると考えていました。19, 20 節の引用のみことば、「神は、知者どもを彼らの悪賢さの中で捕らえる。」「主は、知者の論議を無益だと知っておられる。」は、人間の知恵は取るに足りないものであり、その論議は無益だと言っているのです。神に知恵があり、神は最善しか成されないこと、神に並ぶものはないと知っ

・それがどのように変えられたか？

神がどのようなお方かを知ってゆくほどに、自分がどんなに貧しい者かを知ります。どのように素晴らしい知恵であっても、人間の知恵が神の知恵に優るものではないことを知るべきです。神だけを誇り崇めることです。3:5にあるとおり「アポロもパウロも神が用いられたしもべ」にすぎないのだとパウロは教えます。このようなパウロを神はご自身のわざのために用いられたのです。

IV. すべてに対して喜ぶ者であれ 21b-23 節

・「すべては、あなたがたのものです」 21, 22 節

これは、救われたあなたがたは恵まれた中にあることを知りなさいというパウロの教えです。あなたがたを取り巻くすべてのもの、すべてのことは、あなたがたの益のためにあり、あなたがたのものであると言います。22節にある通り、パウロもアポロもケバも…世界のすべて、神が支配される被造物のすべてをあなたのために用いてくださっているのだと。ローマ8:28に「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」とある通りです。「神を愛する人々」と「神のご計画に従って召された人々」とは、コリント教会の人たちも含むすべてのクリスチャンのことです。ゆえに、すべてのことに喜んで行くことが大切です。

「益としてくださる」とは神にとっての益ですが、それは引いては私たちの益となることです。その当座はわからないことだとしても神への信頼があります。イザヤ14:24-27「万軍の主は誓って仰せられた。「必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの計ったとおりに成就する。25 わたしはアッシリヤをわたしの国で打ち破り、わたしの山で踏みつける。アッシリヤのくびきは彼らの上から除かれ、その重荷は彼らの肩から除かれる。26 これが、全地に対して立てられたはかりごと、これが、万国に対して伸ばされた御手。27 万軍の主が立てられたことを、だれが破りえよう。御手が伸ばされた。だれがそれを引き戻しえよう。」、このように神のみこころだけが成されるのです。神の許しなしに起こることは何一つありません。そのことを真に知っていたゆえに「人間を誇ってはならない」とパウロは言うのです。

そして、23節に「究極の目標」が教えられています。神のみ栄え、父なる神の栄光です。私たち一人一人の霊的成長こそ神が望んでおられることです。22節に「現在のものであれ、未来のものであれ、」と「過去」がないのは、神のものとされている現在とそして、永遠のいのちが与えられていることを教えるのです。私たちは神のものとなって神は用いようとしてくださっていること、神の栄光のために用いられること、そのように生きることを教えられます。私たちの日々の生活における小さなことに対する私たちの選択に神の評価が下ります。

II コリント5:10には「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」とあります。

また、I コリント3:8にも「…それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けるのです。」とあります。これがパウロの確信です。また、これが私たち自身の感謝、慰めとなるはずです。

もし、あなたが正しく神の前に生きているのなら、この教えはあなたに慰めを与えるはずです。しかし、もし、あなたが神の前に立つことに恐れを感じるなら、それはあなたが神の前に正しく歩んでいない結果ではないでしょうか？

